

落語名作全集(第二期) 第二卷

昭和三十七年二月五日 印刷
昭和三十七年二月十日 發行

定価 三七〇円

発行者 八重樫 昊

印刷者 草刈 親雄

発行所 株式会社 普通社

本社 東京都中央区日本橋江戸橋一ノ九

電話(三七) 〇六二・八七四・八七五

振替東京 六四五九三

編集室 東京都中央区日本橋通り二ノ二

電話(三七) 五五二一・三九六八

落語名作全集

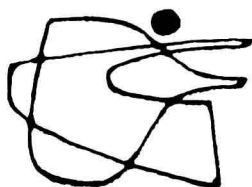
第2期（2）

托洛諸名作全集

外函・装幀 江島 任

カット 中根昌司

はてなの茶わん



春風亭柳枝

・三代目・

エエ、何芸何術にかかわらず、名人ということをお願いします。名人にもあるいは学者だの智者だの有名な先生がたが多くありますが、一つには辛抱がなければなりません。何家業でもみなむずかしいものでございますが、とりわけまして道具屋さんでございます。これは目がききませんとまことに損得のある家業で、ずいぶん茶道具などを扱います道具屋さんはよほどむずかしいものでございまして。

昔江戸にもずいぶん有名な茶道具屋もございましたが、京都の法衣（ほうい）の店（みせ）というところに、茶道具の鑑定（めい）をいたしました人で、茶屋金兵衛という人がございました。この人はなかなか有名な人物でございます。京大阪はもちろんそのころ江戸表へまでも茶金と申しては知らんものはないような高名の人でございます。もつとも諸侯がたへもお出入りをいたしますが、さらに追従（ついで）のない人で。諸侯がたでお求めになりますお道具などを鑑定（めい）いたしますと、少々品が悪くても結構でございますと申し上げるのほかはない。が、茶屋金兵衛は決してそれがございません。少しも世辞なく、これは時代が足らんなら足らん、

写し物なら写し物ということをはっきり申し上げますから、一度は御意に入らなくとも、だんだんしまいには金兵衛に鑑定をしてもらわなければならんように、いずれでもおぼし召すようになりました。箱書付けも茶金の箱書付けと申しては売れたものでございます。

その代りどんな物をもってまいりまして茶道具一式、これは見わからんということはめったにいわん人です。なんでもよく知っていました人で、道具屋さんでございますから折節夜店などをひやかして、堀り出し物をしようという念で歩きますが、もとより顔が売れていますから覆面で、ちよつと新物やなにかの氣に入つた物がありますと、

「モシモシ道具屋さん」

「ハア」

「そのお前さんの膝のわきにあります建水は新物かなア」

「へエ、これは根からお安くいたしときます、新物でございます……」

「ちやっと見せなはれ」

「ハア、お安ういたします……」

と差し出しながら顔を見ると茶金でございしますから、道具屋の方は売りません。

「あなたは法衣の店のだんなはんでおますな？ イヤもうわたいのようなどこのむさい店に、あなたのお目に留まるような物はおまへん。まことにありがたいこつておます。これはこつちゃへしもうておきます……」

といつて断わられます。この道具屋さんが右の品を道具市へもつてまいり、

「サ、建水はいくら？ 建水はいくら……」

「一匁や」

「二匁や」

「ナニいうてや。茶金さんの指さしでおます」

茶金の指さしと申したばかりで一匁か二匁の品が金一枚とか金二枚とかに買い手がつきます。してみますと茶金は人望のあつたもので。

この茶屋金兵衛が毎度清水観音へ参詣をいたします。ある日ほとりの茶店へ腰をかけまして渋茶を飲みながら景色をながめています。掛茶屋の爺イが茶

を出しました。茶わんと申しますは清水焼と申しまして、そのころ十で三十文、一百で三百文、まことに下直な品でございます。彼の清水焼の茶わんへ湯をついだり明けてみたり、しばらくのあいだ金兵衛が余念もなくこう見ていました。茶店の爺イは茶釜の下をたきつけながらヒョイと気がついて、

「あれは法衣の店の茶屋金兵衛さん。指をさしたばかりで一匁か二匁の物が五両にも十両にもなるというに、最前からあのように永とう見ていやはるよつてに、もし彼の茶わんが千両も二千両もするもんだはないか……？ えらい物がわしのうちにあった」

と茶店の爺イは喜んでいました。すると茶店の片すみに弁当を使っていました男は江戸者で、京都へまいり油を売って歩くその日暮らしの油屋で。この油屋も金兵衛の顔を知っていますから、

「あれは法衣の店の茶屋のんだな。あの人が指をさしたばかりで一匁か二匁の物が五両にも七両にもなるてエことはたびたび聞いているが、さつきからあんなに長く見ているからにヤア、なんでもあの茶わんは千両ぐれえに売れるものではないか」

と、これも同じく一生懸命に茶金の手もとをキョロキョロ見えています。金兵衛はなにも存じませんから、しばらくたつて茶わんをそこへおき、茶代を払って帰りました。もつともそのころは一服一泉と行燈に書いてありますを見て、一服一銭とまちがえ一杯お茶を飲みますれば一文おけばいいと心得る一文不通のやつがありまして、十杯飲めば十文おきます。百杯飲めば百文、千杯飲めば一貫おけばよろしいので……そんなにお茶を飲む者はありません。さて金兵衛は帰ってしまいましたあとで、

「お爺イさん、毎度おやかましゅうございます」

「ハア、ゆっくりしていなはれ」

「いいあんべえに天氣がつづきまする」

「ハアご同然に降られたらどもなりまへんな」

「少しお前さんにお問い合わせがあるが。わっちゃアこつちへ来ると店を借りては弁当を使うからいいけれども、ほかで使うときは油屋の身装や荷などはあまりきれいでねえから、だれも茶ア飲む茶わんを貸してくれねえから、茶わんを一つ荷の中へほうりこんでおこうと思うからゆづつてもらいてえ」

「ハア、ようおます。いくらもあるものゆえ、こんな茶わんでよければどれなともって行きなはれ」

「エ！ おくんなさるかイ？ そいつアありがてえ……」

といきなり茶金の見ていました茶わんへ手をかけると、あわただしく手先を振り払い、

「モシ、あんたなにしやはる！」

「これをもらおうじゃアないか」

「これはいけまへん。えら賢いかたやないか……」

これをただもって行かれてはどもなりまへん、これはいけまへん……」

「どれだつていいじゃアねえか。これを……」

「あんた知っているか？ 今ここで永ながとうなが見ていのはれたお人をどこのかたじやと思ひなはる。法衣ころもの店の茶金さんでおます。一つ指をさしたばかりで百か二百の物が五両にも七両にもなるといふじゃおまへんか。ところがこれを最前からおっくり返し引っくり返し永なが、ひねくつていやはったから、これは千両になるか二千両になるかよう知れん。いい物がうちにあると思うていたに……。いつの間にかとん

でもない。これをもって行くて、えらいお人なア」

「オイ爺ぢやうイさん、お前も知つてるか」

「知らんでかいなア」

「そう知られたら仕方がねえ。おれも江戸ッ子で実は茶金が見ているのをこちらで様子を見ていたが、実に値打のある茶わんに違えねえんだが、どうだエ、ものは相談だ、おれに売ってくれないか」

「いんま茶金さんが人をもつてこれを買ひによこすは知れてあるが、茶金さんに売るのもあんたに売るのも同じことでおますから売りまほう」

「エ！ 売ってくれる？」

「ハア売ります」

「いくらで……」

「千両なら売って上げまほう」

「冗談冗談いっちゃアいけねえ。京都クンダリまで来て油を売つておれだ。余計なことはいわねえが三両ばかりある。それに荷は借り物でいけねえが、おれの着ている着物まで残らずお前にやっちゃまうから、三両で売ってくんねエ」

「あほういうてはなりまへん。千両になるか二千両

になるか知れんものを、だれが三両で売りまほう。いけまへん、いけまへん。そんなことをいわずに放しなはれ……」

「売ってくれなければ放さねえ」

「悪いお人やなア。放しなはれ、放さんかい！」

「放さねえ。売ってくれば放すが売ってくれなければこわしまうがどうだ。こわしたつてもともと三文の茶わんだから三文払ってやりやアいいんだ」

「こわれたら一文にもならんワ、困ったなア。三両で売るよ。……千両になるか二千両になるか知れんものを三両で売れてエのは、あんたが無理じゃ」

「無理だって、もとより高い金で買った物ではない、茶金に掘り出されたのがお前のしあわせ、おれのさいわいというものだ。とにかくこれを茶金のところへもって行つて、もし千両に売ればお前に五百両分けてやる。五百両になれば二百五十両ずつ。二百両に買ったら百両ずつ折半よ。きたなびれたことをするおれじゃアねえ。逃げも隠れもしねえからなにしろ三両でおれに預けてくれ」

「情けないなア、千両になるか二千両になるか知れ

もせんものを……。もし千両に売れたらきつと半分わしにくれますか？」

「ウン、きつとやる」

おやじはこわされてはつまりませんから、煙に巻かれてこれを油屋に渡してしまいました。油屋もしめたと思いましたが売り溜めを残らず茶店の爺伊にやり、着類までそこへおき、襦袢一枚で油の荷をかつぎ、茶わんをかかえてうちへ帰ってまいりましたが、その晩は寝ても寝つかれません。翌日は損料で着物を借り、髪を結い上げ、損料の差しつけもちよつと道具屋めえたなりをして、箱を拵えて例の茶わんを入れ、唐更紗の風呂敷へ包んでこれをしよい、法衣の店の茶金の店へまいりました。

「エエ、ごめんなせえ。……ごめん」

「ハア、おいでやす。これはようおいで……」

「エエ、わっちゃア江戸の道具屋でござえますが、だんながお宅なれば少々お目にかかりてえもので。よろしゅうお取次ぎを願えます……」

「ハイさようで。主人は宅でおりますが、ただいまよんどころない来客じやによつて、いま手が放され

まへん。なんのご用か知りまへんがちゃつとお取次ぎをいたしましょう」

「取次ぎじゃアわからねえんだ。番頭さん実アね、わッちゃア大へんな茶わんを江戸からもつてめえりました。千両の品だから一応だんなにお目にかけようと思つてね。次第によつたら売つてもいいが、ぜひとだんなへお目にかからなければならねえが、お宅なればお手間はとらせませんからちよいとお会わせなすつておくんなせえまし」

「ハアさようでおますか。わしも永とう茶道具を扱うていますが、まだ千両というような高金の茶わんを拝見したことがおまへん。どのような結構な茶わんかは知りまへんが、わたいが拝見いたしまほう」

「イヤお前さんが見たつて三文の値打はありません。だんながご覧なさればきつと千両とか二千両とかいう値打があるんで」

「わたいの物を見てわからんものはありまへん。わたいにわからんものはだんなにもわからん。だんなが見てわかるものはわたいが見てもわかります」

「あなたはそりやア日本一の鑑定家だろう。お前さんは大そうな人だろうが、源兵衛さんてエか八兵衛さんてエか衆人が知らねえ。わッちゃアわざわ江戸から茶金という名前を尋ねて来たから会わして下せえ」

「イヤぜひとわたいが拝見いたしまほう」

「お前が見たつてわからねえよ」

「わたいが見てわからんことはおまへん」

「(舌打ち)じれつてえなア! じゃア番頭さん、お

目にかけるがこれを見て笑うと承知しねえよ」

「ナニあんた、他人さまのものを見て笑うなんて、

そんなあほらしいことは必ずおまへん」

「だんなが見りやア笑わねえが、お前さんが見りや

アきつと笑うよ」

「きつと笑わん……笑いまへん」

「笑わん? なにをいつてやアがる。……じゃア笑

うな。断わつておくが、もし笑うと承知しねえよ。

笑うとぶんなぐるぜ」

「アア、笑つたらにやしなはれ。きつと笑わん」

「笑うとぶんなぐるよ」

「笑うたらに、や、しなはれ」

「じゃア見せる……」

と堅く約束をいたしまして、包みのなかから例の茶わんをとり出し番頭の前へ押しやる。番頭はなにげなく手にとつて見ますと、清水焼の三文茶わんゆえ思わずプウツと吹き出す。とたんに頭をポカアリ。

「なにをしなはる、なにをぶちなはる！」

「前もつて断わつたとおり、笑つたからぶんなぐつたんだ」

「笑つたからぶつというて、こんな物をもつて来て千両じゃの二千両じゃのつて、笑わずにおらりようか」

「なにを笑やアがる」

ポカアリ……。

「ア、痛いな。いくつものに、や、しなすつて。関東の方は気が荒うてどもならん……」

と、店先がゴタゴタいたしますから金兵衛が奥より出てまいりまして、

「コレコレ、コレ表を締めエ。衆人が立つてからど

もならん。コレコレお主はなんじゃイ、店先で。

——あんたもどうしやはった。たとえ善かれ悪しかれ、わしという主人があるよつて手込めににやさんでも、悪うあればあるとなぜわしに告げて事をなはらん。あんたわしのうちの番頭を手込めにしてはなりまへんぜ。——また、いま聞いていれば、お主も悪い。善悪にかかわらず他人さまのものを見て笑うとはあほらしい。ちとたしなめ。——大きに根から失礼をいたしました。……あんたがどのようなお腹立ちか知らんが、店でうちの番頭をぶつたりたいたりしてはよくおまへん。関東のかたは気が荒うていけまへんな」

「ヘイ、これはだんなでございますか……わッちだつてなにも理不尽にぶつたのじゃアござえません。

なるほど主人に断わらねえで奉公人を手込めにぶんなぐつてはすまねえが、わッちだつて気がちがつてはいません。始めッからちゃんと断わっておきました、笑うとぶんなぐるつて。——笑わん笑わんというから茶わんを見たら笑やアがつたからぶつたんでエ。もつとなぐるうか！」

「そないにぶたんでもよい。——なんじゃコレお主は素人衆のもつて来やはった品を見て笑うのは失礼だ。——エエ、なんじゃ知らんが、あなたのもつて来やはった結構なお茶わんを拜見いたしまほう」

「エ……。お前さんが見て下さればきつと千両ばかりの値打がある結構な茶わんだから、ウンと落ちて着いて見ておくンなさい」

「拜見をいたしましょう……」

と懷中から袱紗を出してうやうやしく手にとり上げて見ますと、例の三文茶わんゆえ金兵衛も思わずブウと吹き出しました。彼の油屋は真顔になり、

「だんな、お前さんにまで笑われては心細いから、よく見ておくンなせえまし」

「アハ……。あんたは江戸のかたじゃが、なんにも知らんでいやはるが、これは清水焼というて新らしゅうても一つ三文、十で三十文でおます。それにこんな茶渋だらけの物をもって来やはって千両とはなんじゃ。気がいのようなことをいうてはいけまへん」

「それはわっちも清水焼てエのは知ってるが、水で

もついたりこぼしたりしてよく見ておくンなせえ。お前さんもまんざら値打のねえものをキヨロキヨロ見やアしますめえ？」

「こんな物、見るとこもないよつてトットともつて帰ンなさい」

「値打のない物はお覧なさるまい？」

「値打のあるどころか、どないに見ても一つ三文の茶わんにちがいないよつて、早うもつて帰ンなさい。あなたは気がいいだ。一文にもならん物をもつて来やはって八百両の千両のというて。もしこの茶わんをこわしたらもとのとおりにして返せ、千両もどせという手が、江戸の方にはずいぶんそないな強談詐欺をする者もあるが、やめなはれ。茶師や道具屋は銭金があるかと思うて強談めえたことをする人がずいぶんあるもんや。あんたも強談に來たのじゃアおまへんか？」

「なにイ？ わっちも江戸ツ子だ。いやなことをいいなさんな。茶わんをもって来て道具屋へ強談に？ 冗談いっちゃいけねえ。わっちやア堅氣の人間だ。きざなことをいうねエ。なにも無理に買つてく

れるというのじゃアねえや。これはおれのもんだからたつこわしてしまえばすむんだ。なにをいいやがる、上方かみだぜいろくめエ。なにをキヨロキヨロ見やアがるんでエ」

「あんたのことをいうではないが、強談ちやうだんといわれても仕方がない。三文の茶わんをもつて来やしゃつて八百両だの千両だのといえぱなんといわれても仕方がおまへん」

「仕方があるもねえもねえや。なんだ高慢な面つらアしやアがつて。ガブガブ茶ア飲むねエ！」

「ハアわしが茶々飲んででは悪うおますか？」

「茶ア飲むなら当り前めえに飲め。こっちはあしたから素ッ裸になつたまま駆け落ちだ」

「ハア、おかしなことをいうやな。なんだかちやつともわかりません……。茶々飲んだら裸になつて？……アア、そういえばどつかで見たようなかたじやと思つていたが、あんたはきのうの清水の観音さんの掛茶屋で、弁当を使つていた油屋さんじゃアおまへんか」

「エエ油屋だ、大油屋だ、そのアブでござえます！」

「なんじゃイ、いまもつて来やはつたはあの茶わん？」

「エへ……実アあの折りの茶わんだと申し上げればよかつたんですが、少し値売りをしようと思ひましで、ヘイ……」

「イカサマあれかいなア」

「あれかいなア……」

「なんじゃ、人のまねをしやしゃつて。あの茶わんはなア、割つて話をするからよく聞いて下され。手にとるとボタボタ漏るじゃ。茶を明けて見ると傷がない。傷のないものが漏るといふはおかしいと思つて、また茶をつぐとボタボタ漏る。明けて透かして見ても全く傷がない。これはおかしいことやと思つて久しいこと傷を捜していましたが、値打あるよつて見ていたのではない。漏る茶わんや」

「漏るエ？ ヘエ……オヤオヤ……オヤオヤ……わツちゃアまたお前さんがあまり長くひねくつていたから、大へんに値打のあるもんだと思つたが、漏るんでげすか。アア大変なことをしてしまつた。漏るなら漏ると一言断ことごとわつておくんなさればいいに。し

よしのねえことをしてしまったなア……。面目ねえ話だが、実アお前さんが指をさしたばかりで手にふれねえでも、百か二百の物が五両にも十両にもなるてエことを聞いていますから、お前さんがおつくり返し引っくり返し見ておいでなすったからなんでも大金になる品だと思ひ、爺イがいやだというのを無理にゆすって、わッちゃア裸になつておまけに三両で買つて来たが、漏るんですかイ」

始終を金兵衛が聞いており、なにか感じましたか、

「アアさすがは関東のかたや。おもしろいな。アア関東のかたはおもしろい。——聞いたか藤兵衛。

——モシ江戸はん、この茶わんにはかまわずに茶屋金兵衛というわしの名前を三両に買うて下はったのや。……ようおます。あんたにえらい損をかけてはなりまへんから買ひましょう」

「エ！ そいつアありがてえ。いくらで」

「三両で」

「じゃアちつとももうかりヤアしません」

「もうけえでもええ。一文にもならんものを三両で

買うて下はつたによつて、その心持ちを三両に買うので。しかしなア油屋さん、道具屋という商売はよいものじゃと思つてはなりまへんよ。あんたはやっぱり、しなれた油屋はんをしていればまちがいはない。知りもせんことを人のまねすれば必ず損が行くによつて、今後は決して道具屋のまねをしようと思わんがようおます」

「へエ、よろしゅうございます。まことに面目次第もございませぬ。恐れ入りました。……じゃアこの茶わんはおいてまいりましょう」

「ナニ、おいてもおかいでもよい」

と金兵衛は澄ましています。油屋は茶わんをおき、三両の金をふところに入れ、面目なくなく歸つて行きました。あとで小僧さんが例の茶わんを箱のまま棚のすみへ上げておきました。

そののち金兵衛が近衛さまからお茶席のご案内を受けましてお詰めを働き、お客さまが残らずお帰りになりましたあとで、金兵衛と近衛さまと膝組みでございます。

「金兵衛、なにか珍説はないか」

とお尋ねのありました節、彼の油屋の話を上へ申し上げましたところ、ことごとく御意に入り、大そうお笑ひ遊ばしまして、

「しかしその茶わんとても傷なくして漏るは不思議なり。どのような茶わんじゃか磨が見たい」

との御意でございますから、ご覧に入れないわけにはまいりません。早速宅へ帰って棚のすみからとりおろし、掃除をいたしまして早速近衛さまのご前へもって出しました。近衛どの、お手にとり上げたまい、水をついでご覧なさると、なるほどポタリポタリと漏ります。明けて透かして見たが全く傷はございません。しばらくお考え遊ばして、かたわらのご文台にあるお短冊をとり上げてサラサラとおしたためになりました歌に、

清水の音羽の滴の音して（落として）や

茶わんも日々（鱗）に森（漏り）の下露

というをご染筆でございます。

さて近衛さまのお短冊がついてみますと、この茶わんもひとかどのお道具となりましたから、金兵衛も喜んで大事にしておきました。すると近衛殿より

この趣きを一天万乗の君へ申し上げになりますと、
「それは珍らかなる茶わんなり。朕も見たい」

とご勅命がありましたから、とりあえず近衛殿より茶金へ達し、右の茶わんを主上へご覧に入れますと、時の御門、玉掌にとつて水をなみなみついでご覧ぜられますと、茶わんは遠慮がございません、油屋の前でも近衛さまの前でも主上のご前でも、一向平気でポタポタ漏っています。水を明けてご覧になれば全く傷はございません。茶わんを下へおいてしばらくお考え遊ばしまして、

「はてな……」

綸言汗のごとく出てふたたび返らず、箱の蓋へ万葉仮名で、「波天奈」と記しました。こんどは主上の箱書付けという茶わんです、大へんな茶わんもあるもので。そうなると帰りには茶金がしよってまいるわけにはまいりません、新に箱をこしらえ、まわりへ注連縄を張り白丁を着た人がこれをつぎまして、

「下におろ下におろ」

という制止声ゆえ、ひびたけの入った茶わんに